

追悼特集

とく りょう こう 禿 了滉 学園長先生 ご逝去

禿 了滉 学園長先生が、令和2年2月18日(火) ご逝去されました(享年94歳)。
高等学校から始まり短期大学、短大附属幼稚園、そして大学と、先生の歩みは学園の歴史そのものでありました。
学園の発展のためご尽力されたそのご功績の一端をご紹介します。



■ 主な経歴

学校法人福井仁愛学園学園長	平成8年4月～令和2年2月18日
学校法人福井仁愛学園理事長	昭和47年12月～平成18年1月
仁愛女子短期大学長	昭和44年4月～平成18年3月
仁愛女子高等学校長	昭和40年4月～平成8年3月
仁愛女子短期大学附属幼稚園長	昭和44年4月～平成18年3月
社会福祉法人仁愛福祉会理事長	昭和49年4月～平成8年3月

■ 主な受賞

従五位	令和2年3月17日付閣議決定
勲三等瑞宝章(私学振興功労)	平成14年4月29日
福井県政功労賞(教育功労)	昭和58年5月3日
藍綬褒賞(女子教育功労)	昭和58年4月29日
福井県知事表彰(私学教育功労)	昭和46年11月12日

■ 主なご功績

仁愛女子高等学校の刷新、部活動の振興

高等学校は昭和20年の戦災、昭和23年の福井震災による壊滅的な痛手から少しずつ立直っては来たものの、教育内容は戦前からの家庭婦人としての教養教育、裁縫女学校の色彩を強くもつ家庭科高等学校でした。先生は当時の理事長・校長であった父 禿 了信先生を助け、昭和37年から教頭として、昭和40年4月から校長として、同校の教育を近代社会の担い手としての女子教育に変貌させるべく活躍しました。加えて、校地の拡張、グラウンド用地の取得などを行いました。

また、部活動の振興にも力を注ぎ、先生が就任するまで同校の方針として、家庭婦人に勝負は不用と対外試合は一切禁じられていましたが、それを改め、昭和37年には福井県高等学校体育連盟(県高体連)に加盟、運動部、文化部ともに力を入れました。

仁愛女子短期大学附属幼稚園の設置

短期大学に保育科の設置を企画推進すると同時にキャンパス内にその研究、実習施設として、附属幼稚園の設置を企画し、昭和41年4月保育科(現幼児教育学科)の設置と同時に附属幼稚園を開園しました。

以来、数回にわたり園舎の増改築、体育館、図書館、プール、アスレチック広場等年々施設の拡充を図ってきました(現園舎は平成29年に改築)。

県内私立幼稚園では唯一3～5年周期で公開保育研究会を開き、県内及び近県の公私立幼稚園、保育所の教諭、保育士の研鑽の場として現在も活発に研究討議がなされ県内の幼児教育の一端を担っています。

社会福祉法人 仁愛福祉会 仁愛保育園の設立

学園創立者 禿 了教先生は深く聖徳太子のご事業を仰がれ、四箇院(敬田院、悲田院、療病院、施薬院)のうち、敬田院に当たるものとして婦人仁愛会教園(学園の前身)を、悲田院に当たるものとして福井育児院を同じく明治31年4月福井に創設しました。その後、福井育児院が絶えてしまったので、創立者の念願を思い、昭和49年4月、社会福祉法人仁愛福祉会を創立し、仁愛女子短期大学の至近距離に仁愛保育園を設立して、福祉事業を行うと同時に、短期大学幼児教育学科の学生に対して、福祉の心と実技の実習の機会を得る場としました。

仁愛女子短期大学の設置

昭和30年代に入ると女子の高等教育志向は急速に高まり、先生は、まず当時高等学校に設置されていた被服専攻科のカリキュラムを短大の内容に近づけるとともに、地域の要望に応じて女子短期大学の設置を企画、たまたま福井市に隣接する森田町からの短大誘致の動きもあつて、昭和39年1月、森田町天池地区(現福井市天池町)に校地を取得、それから一気に短期大学(家政科)設置に向かって突き進みました。校舎建築、指導体制の確立など設置準備全般にわたり奔走し、翌年昭和40年4月に仁愛女子短期大学を開学しました。昭和57年4月には、武生市(現越前市)の誘致により武生キャンパスを開設し家政学科(現生活科学学科)を移転、福井キャンパスには保育科(現幼児教育学科)・国文科・音楽科を置き、県内の高等教育を大きく推進しました。

仁愛大学の設置

平成に入って男女共生社会の推進が国の方針となり、高校生の進学が女子においても四年制大学を志向するようになったこと、日本の社会において人間関係が切れて孤立化の様相が深まり、今こそ、「仁愛兼済」の精神(人間のつながりの認識、すべてのいのちへの敬愛と共生、それに基づく思いやりと社会貢献の実践)をアピールすべきと痛感したこと、福井県及び武生市(現越前市)から大学の設置を要望されたこと等により、先生は平成8年男女共学の四年制大学の設置を決意し、自らが福井県、武生市をはじめ各方面に協力要請し、設置を軌道にのせました。そして、学園創立百周年を機に短期大学の武生キャンパスに平成13年から仁愛大学を設置(福井キャンパスには短期大学として3学科に統合)しました。



“学園長先生に学ぶ”— 深淵なる宗教的教育理念

仁愛女子短期大学 名誉教授 清水 英 男

先ず、先生の経歴についてその略歴を紹介しよう。先生は旧制第四高等学校を卒業し、京都大学哲学科に入学し、次いで大学院を卒業された。卒業と同時に、昭和28年（1953年）仁愛女子高等学校の教諭、兼校長代理として赴任された。

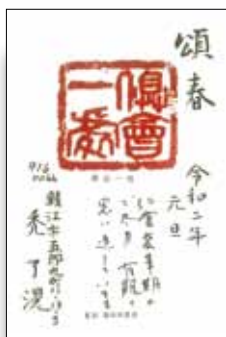
さて、昭和25年に短期大学制度が発足すると、毎年、全国的に女子の短期大学が設立された。当時は4年生大学への進学より短大志向が強く、新設校が増加の二途をたどる中、本学園も短大設立の準備に着手したのであった。昭和40年度の開学に向けて準備を開始したのは、昭和35、6年ごろからで、先生は先導的に推進役を務められた。40年（1965年）4月開学すると同時に学長代理に就任され、次々と学科増設の推進の任に当られた。学園長に就任されたのは平成8年（1996年）であった。その間、昭和58年（1983年）には藍綬褒章、次いで平成14年（2002年）には勲三等瑞宝章を受章された。

ここで先生から直接、個人的にお聞きしたエピソードを二つ紹介しよう。先生は生まれた時、虚弱児で医者が「この子は15歳までの命が無理かもしれない」と言われたとのこと。次いで、高等学校に在学中の18歳の頃、肺結核を患い、半年間入院された。まだストレプトマイシン特効薬が発見されていない時代で、看護婦から献身的な看護を受けて感動されたのである。「以後、自己中心的考えが大きく変わった」と語られた。実はこの時が、先生の「親鸞聖人の教えとの出会い」であった。

さて、本題の学園長先生のお教育理念について語るには、「20世紀の時代認識」を知る必要がある。20世紀は目覚ましい科学技術の進展に追われ、「豊かな心のつな

り」を失い、物中心で人間喪失の世紀であり、戦争と差別の時代であった」と先生は概観された。その認識に立脚して「21世紀は人間回復の世紀」、つまり「平和な世界」が世界中の願望であった筈なのに、凶悪犯罪の一般化、低年齢化など、寒々とした社会現象が拡大傾向にある」との認識である。今こそ人間という漢字が示す如く、人は関係的存在という組織に立脚して初めて人たりうるのだ、と説く。そして、(1)人と人とのつながりを通じて、(2)自己の命の広さを見つめ、(3)自然との関係を通して生きることの重要さに気付くこと、(4)命の尊厳性に感動する、以上の4点のつながり、四恩を自覚し、限りなく生かされている命の感動を教育活動の出発点にすべきだと、その著書で書いている。そして、これが仁愛学園の出発点だと強調された。

最後に、学園長先生からいただいた最後の年賀状を紹介したい。



「俱会二処」（くえいつしよ）仁愛変革期のご尽力有難く思い返しています。
（「くえいつしよ」とは、仏と二つのところ、即ち浄土で出会うこと、である。）

著者／しみずひでお

昭和33年 同志社大学文学部教育学科専攻卒業

昭和34年 仁愛女子高校教諭、英語担当

昭和40年 仁愛女子短期大学講師、助教、教授

平成19年 英語、教育学担当

昭和50年 平成19年 福井大学非常勤講師、英語担当

学園長先生を偲んで

副学長 島田 貢明



「人の世の花園をつくらう、美しい世をひらく灯となろう。」「短期大学は決して四年制大学の2分の1大学ではありません。根の力を育てこれからの長い人生の方向と生き方を決める、貴重な体験の場なのです。」これは学園長先生が、式典などの挨拶でいつも皆さんに語り続けてきた言葉です。本学の建学の精神を表す言葉であり、私もこの言葉に立ち戻るように心掛けてきました。

また、学生に対する支援に力を惜しまない方でした。仁短祭のテーマに沿ったパンフレットの表紙絵を学園長先生にお願いしていましたが、紹介した学園長先生のお言葉を大切にしていきたいと思えます。



学園長先生との思い出

生活科学学科食物栄養専攻教授 牧野みゆき



いつも学園長先生の優しい眼差しとお声がけに励まされていました。武生キャンパスで食物文化コースの大量調理実習を担当していた時に「今日のエリアは本場のものより美味しかったよ」などと褒めてくださり、苦労が報われた気がしていました。当時の私は（今も）人見知りでおとなしく、大量調理経験がほとんどないのに授業がうまくやっていけるのか心配だったのでしよう。

福井キャンパスに移ってからは、「栄養指導してもらえんか」と研究室を訪ねてこられたことが数回ありました。しみじみと「食事は大切だね」と仰っていたことが懐かしいです。平成9年最初の全学会議で、河合隼雄氏が書かれた「ひとつに賭ける」という記事を引用してお話されたことが強く印象に残っています。歳をとった今は「生かされている」と強く実感するようになりました。学園長先生の数々のお言葉を思い出しながら、精一杯生きていきたいと思えます。